スノー・マジック・ファンタジー

孔田多紀

1

　雪が降りしきる闇のなか、何人もの男女が激しく身を躍らせている。背後では、木造の簡素な小屋らしきものが強く燃え盛っているのだが、それを気に留める者は誰もいない。と、突然、青い人影が一瞬輝いたかと思うと、再び、同じリズムに体をゆだねる彼らの姿が映し出された。やがて炎をバックに、「ルビンの壷」を想起させる向かい合った二人の男女の顔のシルエットがクローズアップされ、互いの唇が急速に近づき……接触する間際で離れた。

　――なに見てんの？
　隣席のハルナに耳元で囁かれ、驚いたノリコは、ユーチューブのアプリで見ていた昔のコマーシャルの動画を一度ストップした。スマートフォンにつながるイヤホンの空いているもう片方をハルナの左耳にさしこみ、画面を彼女のほうに向けてまた冒頭から再生を始めると、いきなり曲のサビが流れだす。
　――あっ、「チュー・チュー・トレイン」じゃん。
　そういうと、動画が終わるまでのあいだ、ハルナはリズムとともにひとしきり静かに頭をふっていた。歌詞と完全にあった口パクつきで。
（元気だなあ）
　目的地へ向かう新幹線に全員が合流してから、一時間ほど経っただろうか。到着までは二時間もないものの、朝が早かったためか、同じ大学に通う他の六人の軽音楽サークル員たちは皆、進むにつれ口数が少くなり、やがて眠りだした。ハルナも眠っているものだとノリコは思っていた。自分の眼は冴えたままだった。昨日は全然寝つけずに、午前三時まで起きていたのに――。一人で窓の外を眺めるのにも飽き、ふと、父親が今朝話していたことを思い出して、スマートフォンをとりだしたのだ。

　出発前、階下のダイニングまで駆け下りると、父親はすでに食卓につき、いつものように朝刊を読んでいた。焼きたてのバタートーストを紅茶で流しこむノリコへ、
　――友達とスキー旅行なんてもう僕も、学生時代以来行ってないなあ。
　とおもむろに話を向けてきたので、
　――遊びで行ったの？
　――いや、山岳部の行事が多かったよ。母さんも一緒に、大勢でいろんな場所へ……。
　父親は今年で五十一になるから、一九六二年生まれ。ノリコが物心ついて以来、ずっと忙しそうにしていたが、まだ幼かった頃は、山や川へ家族でよく遊びに行った記憶がある。いまはもっぱらゴルフのほか、休日にからだを動かしている印象はないけれど。母親とも、まだお互いに学生だった頃、その部活動で出会ったのだという話は、これまで何度も聞かされてきた。
　家から駅までは徒歩十五分だが、坂のきつい道を重たいキャリーケースを引いていくのは、と心配した父親がタクシーを呼んでくれた。月曜日なので、広告代理店に勤める彼は一緒に乗り、普段どおり中央線でそのまま出勤する。
　――どこで滑るんだっけ？
　――Ｙだよ。
　ノリコはこれから向かうスキー場の地名を挙げた。すると、隣に座った父親は、
　――あーっ、懐かしいなあ。昔、そのあたりのリゾートのＣＭ作ったんだよ。
　といって、本当に懐かしそうに顔をくしゃくしゃにした。
　――どういうＣＭ？
　――今とは別の会社にいた時なんだけど、ちょうど平成に入った頃だったなあ、君の生まれる少し前。若者向けにスキー旅行をＰＲする企画で、それからシリーズとして毎年……。
　と、鉄道会社を主体にしたその大規模なキャンペーンの概要を、ノリコは簡単に説明された。
　まだ三十前だった父親は、スタッフの一員として関わるにすぎなかったが、プロジェクトがかたちになるにつれ、山岳部で培われた雪への情熱が彼のなかでよみがえった。そしてシーズン中には、自身も何度か当地を利用した。キャンペーンが成功を収め、春になろうとする頃、もはや役目を終えつつある見飽きたキャッチコピーを目にして、とつぜん、山岳部の先輩のことを思いだした。
「タカミ」というその男性は、父親より三つ歳上だった。周りを引っ張っていくタイプの硬派として学外にまで知られた人物で、入学したばかりの新人には、怖い存在に映った。向こうは一年間浪人していたため、当初は二学年違いだったものの、要領よく単位を積みあげる父親とは対照的に、留年を重ねた。
　――たしか僕と同じ年に卒業したはずだけど、どうしてるんだろうなあ。
　父親はどこか遠くを見るような目をして、首をかしげた。何かを思い出そうとするときの、いつもの

癖だ。
　そこから彼が話したことを要約すると、以下のようになる。
　父親が四年生の春、先輩である彼、「タカミ」の故郷Y――これからノリコたちが向かおうとしている場所だ――のある山へ、泊まりがけで行った際のことだった。二日目の朝、タカミは奇妙なことをいいはじめた。雪男に出会う夢を見た。それはとても強い印象で、しかるに自分は今後、彼にもう一度会わなければならない。……ヒマラヤを目指して。
　自他ともに厳格であったリーダーが急にそんなことを公言したため、誰もがとまどった。前の晩、同じテントに泊まっていた父親は尚更だった。その際は他に何事もなく戻ったものの、それからタカミは、すでに長く居すぎたとはいえ六年目にして、あれほど密接に関わり牛耳っていた部からしだいにフェイドアウトしてゆく。あっけなく卒業可能な単位を取得し、大学も出ていった。残された人間で、その後の行方を知る者はいない。
　――後から考えると、タカミさんは俺より三つ上だったから、七〇年代のノストラダムス・ブームとか、広島のヒバゴン・ブームのとき、中学生くらいだったと思うんだよね。石原慎太郎がネッシー探検隊の隊長したりとかさ。思春期ど真ん中。俺もけっこう好きだった頃があった……。まあ、俺の話はどうでもいいんだけど、でも大学生くらいになるとさすがに恥ずかしくてさ。だから、タカミさんがいきなり雪男なんていいだしたときは、え？　そこ？　って思ったよ。だって、地元の山に登って、なんでいきなりヒマラヤの話が出てくるんだろう。それに、僕らの活動はほとんど、国内に限られていたし。でも夢にでてきたからといって、聞かないの。みんな理解できなかったよ。とはいっても決意は固いようだし、怖い先輩に諭せるでもないから、どうしたものか……タカミさんが部に出なくなって、ほっとした部分もあるな、正直なところ。
　そのとき、ちょうど車が駅前に着いた。

　改札を入って別れ際に父親は、付け足すようにいった。
　――余計な話ばかりしてごめんな。じゃあ、気をつけて。

2

　――ていうのが今朝、お父さんから聞いた話で、そのころ、スキー場のキャンペーン・ソングとして流行ってたのが、「チュー・チュー・トレイン」だったんだって。知ってる？　「チュー・チュー・トレイン」の“トレイン”は、スキー場に向う新幹線のことなんだよ。
　ノリコは、今朝の父親との会話をそんなふうに整理してハルナに説明した。彼女は軽音楽サークルに所属する同じグループのメンバーで、今回一緒に来ているシュンタロウ、タマオ、マドカ、ミツキ、ツバサも同期だ。期末試験が終わり、三月末にある卒業者追い出しイベントのための練習が活発化するまでのあいだに、どこか旅行に行こうというタマオの発案がきっかけだった。
　先ほど起きだしてトイレに行っていたタマオが、四人がけのボックス席に帰ってきた。
　――お、なんの話？
　――雪男がいるんだって。これから行くYに。
　軽く問いかけたタマオに、ハルナが返すと、
　――ああ、そういう話だったら、シュンタロウが得意なんじゃないの？
　タマオが隣席のシュンタロウを揺さぶった。
　すぐに目覚めた彼とタマオに、ノリコはひとしきり、ハルナにしたのと同じ話を語り直す。
　――Yに雪男ねえ。聞いたことないなあ。
　ノリコは二人に左右のイヤホンをさしだし、また例の父親が携わったという動画を見せた。タマオは始終にやつきながら、
　――CMの最後に「雪男。雪女。」っていうキャッチフレーズがあるじゃん。あそこのナレーターのいい方がなんか、スケベそうで、いかにもバブルっぽい感じ。
　と、自身はまだ生まれていなかっただろうに、当時を知っているかのようにいう。
　起き抜けのシュンタロウは、首をひねりつつ、
　――そもそも、雪男と雪女はまったく違う話だよね。一方は未確認の巨大生物、もう一方は妖怪だから、同類でも対義語でも、なんでもない。単なる語感じゃないか。
　――いいじゃん、別にオカルトのCMやってるわけじゃないんだからさ、雪男や雪女が本当にいると思って出かけて行くやつなんか、いないだろ。
　と、いつものように議論の起こる気配がただよう。
　――雪女って、なんだっけ。助けた鶴が訪れてきて、機を折ってくれる話？
　ハルナがそう尋ねると、シュンタロウは、
　――違う違う、それは鶴の恩返し。雪女は鶴とは関係ないんだよ。有名なのは、小泉八雲の『怪談』に収録された話じゃないかなあ。
　とすぐさま否定し、ムッとするハルナにはかまわず、それからとうとうと語りはじめる。

武蔵の国に、若い者と年老いた者、二人の木こりが住んでいた。ある日、一緒に山に出るが、吹雪のなか川の渡し守が先に帰ったせいで戻れなくなり、近くの小屋で休むことになる。夜、若者が目を覚ますと、いつの間にか白装束の女が入ってきている。老人のほうに、ふっと息を吹きかけた。そして若者へ近づいてくる。いったいどうする？　が、驚くほど美しい女は彼の顔を間近につくづく眺めると、おまえは美少年だから殺すのはもったいない、命は助けてやろう、という。しかし今日自分と出会ったことは生涯、誰にも口外してはならない、話せば再びおまえを殺しにやってくるぞ。そういって出て行った。すぐに老人を確かめたが、すでに冷たくなっていた。
そのようなわけで、若い男は命拾いした。一年が経つ頃、ふとした拍子に余所からきた女と村で知り合い、急速に結ばれる。一緒に住んだ母親は五年後に亡くなったものの、十人の子供にも恵まれ、男と「雪」というその妻は睦まじく暮らしていた。そんなある晩、針仕事をしていた妻に男は語りかける。俺が若かった時、不思議な体験をした、とても美しい、いまのお前に似た女で……。それから妻は、話をこう促す。その人の話をしてちょうだい。男はあの恐ろしい夜のことを語って聴かせる。あれは夢だったのか、本当に雪女だったのかーー。すると急に妻は立ち上がり針仕事を投げ捨て、男に向かって叫ぶ。
ーーそれは私、私、私でした。……それは雪でした。そしてその時あなたが、その事を一言でも云ったら、私はあなたを殺すと云いました。……そこに眠っている子供等がいなかったら、今すぐあなたを殺すのでした。でも今あなたは子供等を大事に大事になさる方がいい、もし子供等があなたに不平を云うべき理由でもあったら、私はそれ相当にあなたを扱うつもりだから。
女は再び小屋を出て行き、二度と戻ってはこなかった……。

女の去ってゆくジェスチャーを示すシュンタロウの左手に、窓から射しこんだ眩しい日がかかる。進行方向を背にノリコの斜向かいに座る彼は語り慣れた口調だったが、やはり冬の朝、まだ明るいうちに怪談はそぐわない。
ーーでさあ、雪女は何がしたかったわけ？　それほど子供がかわいいんだったら、話を打ち明けられたのは自分なんだから、黙っていて、そのまま暮らしを守れば良かったんじゃないの？
ハルナが呆れたようにいい、対面するかたちのシュンタロウは、
ーーいや、この話の本当に重要な部分は、そういうことじゃないんだよ。ラフカディオ・ハーンが伝えたかったのは、……。
文化史を専攻しているというシュンタロウは小泉八雲について熱弁を展開したが、聞いているとところどころ、理解の難しい箇所がある。彼自身のなかでもまだ馴染んでいない、生煮えの言葉という感じ。今回のきっかけはーー（そうだ、確かリゾートCMの話題だったのでは？）詳細になってゆく話についていけなくなったノリコは、外に顔を向けたり、前のボックス席の三人を気にしたりした。タマオも興味を失ったようだった。
そのとき、彼方の空で雲が大きく切れたのか、シュンタロウの頬骨のあたりまで、強い日射しがすっと伸びてきた。本人は気づかないまま、ハルナと議論を続けている。白い肌の輝きが増して、ノリコの瞳に飛びこむ。
……この青年の意外に端正な横顔に気づいたのはいつ頃だっただろうか。ノリコはひそかに胸のうちで言葉にする。もはや小泉八雲など、問題ではない。
ーーそれは、そんなふうに話されたら誰だって、なんて馬鹿な男なんだろうって思うけどさ、まさか自分の奥さんが、雪女だとは考えないよね。そしていきなり出て行くとは思わないんじゃない、自分と子供を置いて？
ーーいや、そうじゃなくて、これに似た話は元々、全国各地にあるんだよ。それは自然への畏怖だったんだろうけど、小説版になると、そこに人間的な想いのようなものが……。
ーーだいたい、男のほうもなんで追いかけないんだろう。残された子供たちはいったい、どうするのさ。
ハルナはしぶとく食い下がっていたが、やがて、もうすぐ到着するとのアナウンスが頭上で流れた。
眠っていた三人を叩き起こし、準備を終えて降車を待つと、ドアが開くなりどやどやとホームへ転げこむ。ふだんから仲のいいグループだったが、泊まりがけの旅行は初めてだ。二泊三日のあいだ、いったいどのような運命が待ち受けているのか。誰もが期待を膨らませる。
改札へ向かっていると突然、シュンタロウが立ち止まって、服のポケットをまさぐり始めた。
ーーどうしたの？
ーー切符が……。さっきまではあったんだけどなあ。
彼とノリコを後ろから追い抜いたハルナは、自分の切符を、挟んだ二本の指の先でひらひらと見せびらかせて、
ーーだっさ。
とシュンタロウへ蔑む調子でいい、さっさと進んでいく。雪女の話の仕返しらしい。
ーークッソ、あいつ……。

ーー大丈夫？
他の五人はすでに姿が見えなくなっている。こんな場合は、焦れば焦るほど出てこないものだ。
ノリコは留まることにしたが、結局、鞄の中から見つけるのには時間を要し、改札前でずいぶん他の皆を待たせた。

3

部屋へ荷物を置くなり、宿の食堂に突撃して軽く腹ごなしを済ませた一行は、しばらくするとさっそくバスでゲレンデへと向かった。
エントランスとなっている建物から、八人がけのゴンドラに七人で乗り、雪山へ移動する。揺れる機械の隙間から、水分を含んだ冷気が入り込んでくる。
ノリコがスキーウェアに身を包んだのは、中学の修学旅行以来六年ぶり。もともと今回ここに来たのは皆、本格的に滑るためではなく、遊び感覚だから気も楽だ。
辿り着くなり、さらにリフトで上方へと向かう。よく晴れた日で、澄んだ空の向こうに、周りを囲む山々がそそり立って見える。雪原の照り返しは目に痛いほど。
そして、ようやく降り立った。ノリコが大きく息を吸い、鼻を痛めていると一一不意に、グシャッと音を立てて、肩の横にぶつかったものが砕けた。見れば、ハルナが雪球を投げたフォームを留めた姿勢で、数メートル向こうに立っている。
ーーうわっ、いきなり……。
ーーよそ見してるほうが悪ーい。
そのままニカッと白い歯を剥く。すると今度は、背を向けたほうから、服の上を冷たい感触がドサッドサッと次々に伝わってくる。
ーーもう、ちょっとさあ、……。
文句をいうつもりで振り返ると、両手に雪玉を持った四人が待ち受けていた。

一方、シュンタロウは、仲間たちから離れ、ひとり滑降の準備を始めていた。
ーーなんだ、あいつはー。空気の読めない奴だなあ。
雪玉が飛び交うなか、ハルナはシュンタロウに向けて投げつけたが、もとより届くような距離ではない。
彼はスキー板を装着し終え、ちらっとハルナのほうを一瞥すると、上級者向けのコースへと向かい、勢いよく滑り出した。傾斜のある真っ白な面を蛇行するように、慣れた様子で大ぶりに下っていく。
ついさっき、新幹線のなかで雪女について延々と語っていた姿とは対照的だ。グリーンのパンツと鮮やかなイエローのスキー板が、ハルナの眼にまぶしく映る。
タマオの攻撃を避けていたノリコは、すぐ横でたたずんでいたハルナに気がついた。先ほどの返礼とばかり、軽い気持ちで一投してみる。彼女の予想以上に飛距離を伸ばした雪の塊は、ハルナのベージュ色のニット帽に当たり、見事に砕け、四方に弾けた。
すると、ぐらっと身体が揺れたかと思うとハルナの身体が、その場に崩れ落ちた。驚いたのはノリコだ。
ーーあ……ハルナ！
すぐに駆け寄る。あんな小さな玉が頭にぶつかったからといって、そうダメージになるとは思えないが……しかし、不思議な倒れ方だった。
ーーごめん、大丈夫？
抱き起こすようにして、ハルナに問いかける。
ーーあー、なんでもない、なんでもない。ちょっと足が滑っちゃって……。
弁解しながら雪を払って立ち上がるハルナの様子がしっかりしたものだったので、ノリコは安堵した。
すると、おおーっと背後で歓声が上がった。見ると、タマオが、
ーーシュンタロウ、あんなところにいるよ。
と指し示した。
再び前方に眼をやれば、シュンタロウが颯爽と滑ってゆくのが見えた。相当な腕前なのだろうと一目でわかる。
（すごい、すごい）
思わず手を振ったノリコだが、豆粒よりも小さくなったシュンタロウの後ろ姿は、身体を大きく傾けて長いカーブをゆっくり描くと、やがて見えなくなった。

ーーあんなに上手いなんてさー、けっこうビックリだよね。超カッコよかった。

――……父さんも母さんも、若い頃からスキー好きだったらしくて、俺もよく連れて行かれたんだよ。
――いいなー、私なんか全然ダメ。ねえねえみんな、教えて欲しくない？
日もだいぶ高くなっている。
マドカとミツキが、戻ってきたシュンタロウを両側に囲みながら、全員で移動している最中だった。
とつぜん、ハルナが急に彼の肩に手をかけ、ぐいっと引いたかと思うと、前方に立っている青いよれよれのフラッグを指差し、
――あそこまで競走、負けたらデコピン。
といいだし、一人で走り始めた。
――まーたハルナの気まぐれ。
奇矯な行動はいつものことだというふうに、スノーボードを脇に抱えたマドカは呆れた様子でいったが、
――……しょうがないなあ。
とシュンタロウは、面倒くさがりつつもフラッグへと向かいだした。
――えーっ、行くの？
――つかハルナ、今時なんなんだよ、デコピンて。
賑やかな友人たちを背に、すでに小さくなった彼女を追いかける。すると、シュンタロウが抜き去ろうとするところで、ハルナの転ぶ姿が見えた。
悠々と追いついた彼が助け起こし、ついで彼女のニット帽を少しずらしたようだった。そのずっと先に、青く輝く空が広がっている。
（えっ、何、本当にデコピンなんかするの？）
やや間があって、次いでハルナが再び駆け出した。いきなりのことに動けないシュンタロウをよそに、すぐにフラッグに辿り着く。
くるっとこちら側へ振り向くと、口に両手をあてて、
――ヘッポコーッ！
と叫んだ。
風が吹き、彼女の声があたり一面を渡っていく。
シュンタロウを除く残された者たちは、
――なんなの、アイツ？
と、顔を見合わせた。

4

スキー場へ上がったのは午後をとうに周っていたため、短い時間しかなかったものの、帰る頃には、さんざん滑り終えた気分だった。久しぶりだからか、あるいは日頃の運動不足のせいか……と、ノリコは快い疲労のなかで気にかかる。ふだん、コンビニの立ち仕事やベースの演奏も、それなりに体力を要するものだと考えていたのだが……。
宿に入っている温泉浴場から戻ったあと、食堂で豪勢な蟹鍋を食べた。それから、宿のすぐわきにあるコンビニで酒とつまみを見つくろい、男子陣用に割り当てられた部屋で広げる。スキー場からの帰途、覚えた疲労はすでに消えている。時刻はまだ午後九時前。
かたちだけの乾杯をして、飲み会が始まる。しばらくして話題がふと、来月に催される予定の、サークルの卒業生追い出しイベントへと移った。
――シュンタロウ先生は、新曲は作らないんですかね、新曲は？
すでに顔をだいぶ赤くして、できあがった格好のツバサがチューハイの缶を片手に、座卓を挟んで向かい合ったシュンタロウに話しかけたところだった。
彼らが所属している軽音楽サークルは、全体的にそれほどレベルは高くない。創設から若い割に、卒業後も現在まで活動している先輩陣はたくさんいるし、五年前にはメジャーデビューを果たした者たちも出たが、規律は学内の近隣サークルのなかでもあまり厳しくはなく、実演の機会となると流行の曲のコピーがメインとなるグループも多い。そのなかで、シュンタロウとタマオを含む四人組は、ほとんどのパフォーマンスを自作曲でまかなっている。先日ノリコが聴かせてもらった自主制作のＣＤ−Ｒは録音状態がいまいちだったが、周囲では頭一つ抜けているほうだ。
シュンタロウはその曲作りに大きく関与している。
――そういえば、ラブソングっていうジャンル……あれはジャンルなのかなあ……があるじゃない。もちろん好きな曲もたくさんあるけれど、俺、これまで一度も作ったことがないんだよね。「ああ、一つもないな」とこの前気づいて、考えてみたんだけど、言葉が全然出てこないの。
――どうして？　とノリコは尋ねた。
――うーん、いわゆる「私」と「あなた」とか、「君」と「僕」みたいな言葉はもう沢山あるからなのかなあ。でも子供の時はさあ、「ミュージック・ステーション」とかでしか大人向けの音楽は聴く機

会がなかったから、音楽＝Ｊ-ＰＯＰ＝ほとんどラブソングっていう思いこみが、ずーっとあったはずなんだけど。話が長くなっちゃうけど、小学生の頃に、レミオロメンの「粉雪」って曲が流行ったじゃない？　あの歌の割と最初の方に「それでも一億人から君を選んだよ」っていうフレーズがあって、当時何度も耳にするうちに思い出した曲が一つ。うちで親父が持ってた、落合博満＆信子夫人の「そんなふたりのラブソング」なんだよね。

――知らないなあ。とハルナ。

――落合がＣＤ出してたの？　とタマオ。

――いや、ＣＤじゃなくてまだレコード……。えーと、どうだったかなあ（とスマートフォンで歌詞をウェブ上で検索するが見つからず）、不正確だけど、「六千万人の女からお前を選んでよかった」みたいな一節があって。ここでは「六千万人」から選ぶ、なわけ。で、それを思い出した時に考えたのは、選ぶってなんだよ、ということ。だって誰もさあ、実際には、一億人全員からザーッと検索して当たっていって「ウーン、この人に決めた！」なんてことは、やらないわけじゃん。そんな権力も時間もないし。落合博満の歌にはまだ、女に対するキザで大げさなリップサービスみたいな感じが残ってるんだけど、「粉雪」になるとマジっぽいもん。すぐ後の歌詞に「根拠はないけど本気で思ってるんだ」とある。

――あー、そうだっけ。しかしよく覚えてるな。と、これはツバサ。

――だって普通、本気になれるわけないんだよ、〇〇人から一人だけを選ぶって凄いよ、それだけで一生かかっちゃうんじゃないか。「そんなふたりのラブソング」で意味しているのはたぶん、日本の人口の半分ということだろうけど、赤ん坊からお婆さんまで範囲に入るんだから、光源氏でも不可能でしょう。そう考えて「粉雪」に再び戻ったら、やっぱりこれは時代性を反映しているのか、「一億人」というのは、同性も含まれているということなんだよ。単純に考えれば、この方が、多くの共感を呼び、代表できる。だから、「粉雪」は実は、落合博満批判だったんじゃないか。

――いや、別に落合批判のつもりはないだろ。とタマオ。

――そしたらその「粉雪」のちょっと後に、九州男というレゲエの歌手が、「1／6000000000」（六十億分の一）という曲を発表して、いやー、レゲエはよくゲイ差別を批判されたりするけど、震撼した。考えてみたら、たしかに、別に日本人に限る必要はないものね。

――そういえば去年、見た気がするな、地球人口が70億人を突破しましたってニュース。記念すべき70億人目はインド生まれのこの赤ちゃんです、っていう写真まであって。でもあれって、どうやってわかるんだろう。俺が生まれた頃は、確か50億人くらいじゃなかったかなあ……小学校の図書館の百科事典で読んだのを覚えてるけど。

――もちろん他にもこういう歌詞を持った曲はあるんだろうけど、この傾向を推し進めれば、どんどん数はインフレーションしていくよ。60億にせよ70億にせよ、暫定的には、九州男のワールドワイド路線が最強じゃないかな。それより上となると……。

――もう人間超えちゃうな。でも、それだと数字で表現できないね。どこまでを範囲とするか。

――そもそも、幾々人の中から選ぶ、というステージに立っていること自体、凄く非現実的なことなわけじゃない。男であること、日本人であること、人間であること、地球に生まれたこと、宇宙が誕生したこと……そう考えると、もう「私」と「あなた」が出会う確率は、何分の一などとは数えきれないほどの可能性をくぐり抜けてきたことになる。でもそんなこと考えてたら、今度は恋愛を離れて宗教や哲学の方にいってしまう。ましてや歌にはならないでしょう。

――うーん、本当に話が長くなった。というか、言い訳じみてきた。まあまあ、もっと飲んでよ。ほら。

――……ありがとう。冗談はやめにすると、こうした歌詞で前提にされているのは、必然と偶然の取り違えだと思う。またレミオロメンの話になるけど、「粉雪」の前に「フェスタ」という初期の楽曲があるんだけど、そこでは「三叉路十字路五叉路も振りむきゃ一本道だ」というフレーズがあるんだよね。

――今日は妙にこだわるなあ。

――まあまあ、それは別に重要な点じゃない。僕が思ったのは、こうした歌の中では、人物Aと人物Bが選択の果てにパートナーとして結びついた、ということが確率として捉えられているわけだけど、それは確率で考えるような話なのか、ということ。なぜならたいていの場合、それはあくまでも「たまたま」の結果にすぎない。俺がそんなこと歌ってもサマにならないでしょう。落合だから格好がつくんであって。

――はあ、はあ。

――我々がいまこうしてあるのは、そう、いま君らとこうやって話しているのは、確かにある確率の上ではあるけれども、それを必然＝選択の結果と捉えるのは正しいのか。「私」と「あなた」が出会ったのは「偶然」ではなくて「必然」なんだと考えるのは、確かにちょっとした歌の一節くらいにはなるだろう。しかしそれは結局詐術というか、錯覚なんじゃないか。

――だんだん抽象的になってきたから、ちょっと君の話を整理してみようぜ。人物Aと人物Bがパートナーとして結びつくのは、何分の一の確率である、と捉えることができる。この考えが成立するにはいくつかの前段階がある。まず、１）一人の人間は任意のもう一人の人間をパートナーとする。２）そ

れはある選択の結果である。３）選択の可能性は理論上、人類の全人口を最大の数とする……これでいいかな。
　――そう、そんな段階だの確率だの、ふだんは誰も実感してないでしょう。歌の中にしかない世界だよ。フィクションといって良いんじゃないかな。何億人を平等視して、そこから「私」が「あなた」を選ぶっていうのは……恋愛ってもっと差別的なものじゃない。ふとしたきっかけで、あるいは手近なところで互いに知り合って、そのうち仲良くなって、くっついたり離れたり、……そういう生ぐさかったりズルかったりするものじゃない。なんかその方が血が通ってるように思わないかなあ。
　――というかさ、いちいち、そうやって考えるほうが、まだるっこしいんじゃないの。
　――いや、でもだいたい、確率という考え方自体が新しいものだよ。昔はサイコロの目が出る確率は等しく六分の一だ、なんて知ってる人は誰もいなかった。だから、もしタイムスリップして古代ギリシャ人に「それでも一億人から君を選んだよ」という短い歌詞のフレーズを翻訳して読ませても、意味がわからないと思う。
　――当たり前でしょう。そもそも当時、地球の人口が一億人いたのかどうか。

　……ノリコはいつの間にか、眠っていたのだった。

5

　そして翌日の夜、花火が見られるというので、七人は夕食のあと、再びゲレンデへ出た。
　二泊三日の予定だから、明日の昼には帰らなければならない。ノリコはこの日、起きてからハルナとシュンタロウが時折、親しげな様子でふるまうのを目の端でしばしば捉えていた。いったい何が起こったのか……昨日の朝からの出来事を何度もふりかえってみるが、ノリコには腑に落ちない。
　星がよく見える。これほど澄んだ夜空を望んだのはいつ以来だろうと考えるが、思い出すことができない。
　するととつぜん、ひゅううっと笛のような音を立てて、花火が次々と打ち上がった。ドンドン、パラパラッと炸裂音が鳴り、赤、青、黄、緑、紫、色とりどりの光がまたたいて、白い煙が星空を覆い隠していく。
　なぜ真冬にスキー場で花火なのか？　そんな疑問をよそに、予想外に盛大なボリュームの見せ物で、おおっ、と周囲の見物客にざわめきが広がっていく。「まだまだ打ち上がりますよ」とどこからか、女性のアナウンスが聞こえてくる。
　ふと前方に目をやれば、集団のなかに、ハルナとシュンタウが隣り合っているのが見えた。
　シュンタロウがハルナの左肩を二、三度軽く叩いた。ふりかえった彼女の頬に、彼の突き出した人差し指が刺さった。ハルナは何かをいったようだったが、二人の顔が近づき……花火の合間の一瞬の暗がりのあと、離れた。
　ノリコは地上から目を逸らせ、天空を見ようと強く身体を反らせた。音と光の勢いが増していった。しばらくその姿勢を保った。
　そのとき、彼女の首筋が圧迫される姿勢によって脳を循環する血流が妨げられ、流星群が落ちてくる錯覚とともに、視界が急速に白く狭まる。全身の力が抜けて、彼女は深い夢想にとらえられた。

　一九九一年の冬、このYのスキー場で、年若いある男女が出会った。彼らはすぐ愛しあうようになるが、冬の終わりとともに別れた。
　それから互いに別の伴侶を得た二人は二年後、ほぼ同じ時期にそれぞれ子供をもうけた。男には娘、女には息子。もちろんあの冬以来、交流はない。
　十八年後、そうと知らぬまま子供たちは同じ大学に進学し、同じサークルに入会した。さらに二年近くのあいだ、さまざまな接近の機会を経て、二〇一三年二月二十三日のこの日、再びYのゲレンデへとやってきた。
　……二十年以上の時間を眺めるなかで、夢見る者は、強い確信を掴んでいた。

　――ノリコ、ノリコ。
　女の声が聞こえる。
　気がつくと、ノリコは一瞬、目の前に自分の顔があるのを不思議に思った。しかし、口から出た言葉は、相手の名前を正しく呼び当てていた。
　――ハルナ……？
　自分が地面に仰向けに横たわっていることに気がつき、手を借りながら慌てて立ち上がる。
　――あ、大丈夫、大丈夫。
　ノリコが立ち上がると、タマオやマドカたちもいて、

――どこか悪いのかな。
心配そうにいう。
――なんか、見上げすぎて、くらっときたみたいで……。
わずか数分の花火ショーはすでに終わり、観客たちはぞろぞろと戻り始めていた。
――ま、さっさと帰ろうか。
野外照明が灯るなか、列に続いて帰途につく。すると背後から、マドカとミツキの小声での会話が聞こえてきた。
――ねえ、さっきの、見た？
――見た見た。手なんかつないじゃってさあ。
振り返ると、二人とタマオがすぐ後ろにいた。
――なんの話？
――いや、ハルナとシュンタロウ……。
それからタマオが手短に聞かせた話によれば、この旅行は元々、タマオの発案によるものだという。もう長いこと煮え切らない二人の仲に、周囲の誰もが苛立っていた。マドカやミツキたちと示し合わせ、うまくタイミングを見計らい、けしかけるように計画した。
――気づかなかった？
上々らしい首尾に気を良くした様子のタマオから逆に聞かれ、
――う、うーん、どうだろう……。
ノリコは言葉を濁した。
――バレバレだったよね。とマドカ。
――でもさあ、ハルナはたぶん、自分でもわかってなかったんじゃないかな。とミツキ。
――そんなわけないでしょう。
――いや、でもあいつならありうる。とタマオ。
歩きながら会話を聞くにつれ、居たたまれなさが募る。まぼろしのような恋だ。口に出さなければ、誰も気づかない……そうだ、ハルナにもこれまで話したことはなかった。
それから胸の中でしだいに、居心地の悪さが疑問に変貌してゆく。あの夢想に登場した男女はいったい、なんだったのか。二人の子供たちは、シュンタロウとハルナのことなのか。掴んだはずの手触りは、氷が水になったように解け出している、とノリコは厚いグローブに覆われた両の掌を握ったりゆるめたりする。
ふいに、父親が昨日の朝聞かせた、雪男を追いかけたという先輩の話がノリコの脳裏によみがえった。
……その人も実際は、ただ居づらくなって集団を出て行っただけだったりして。

6

旅行から戻ったノリコは、しばらく考えた挙げ句、軽音楽サークルを抜けると、本格的な登山活動を開始した。父親が大学を出た1984年以来の事情を調査し、卒業から就職、結婚、出産、育児、職場復帰のかたわらでキャリアと人脈を積み重ねた。
そして2028年、ネパールのダウラギリ山系付近のある村で、日本では四十年以上消息を絶っていたタカミと初めて出会う。
あの花火の日から、十五年後のことである。

※

【参考・引用資料】

書籍
ラフカディオ・ハーン「雪女」（田部隆次訳）
角幡唯介『雪男は向こうからやって来た』（集英社、2011年）

動画
JR SKI SKIキャンペーンCM（1991年、2013年）
『ロストデイズ』（フジテレビ、2014年）

楽曲

ZOO「Choo Choo TRAIN」（1991年）
EXILE「Choo Choo TRAIN」（2003年）
落合博満・落合信子「そんなふたりのラブソング」（1986年）
レミオロメン「粉雪」（2005年）
レミオロメン「フェスタ」（2003年）
九州男「1/6000000000」（2008年）
SEKAI NO OWARI「スノーマジックファンタジー」（2014年）